

作・演出 市原佐都子(1)

私は見えないものです
見えないことにされるもの
見えないことにされるということは
見えないことと同じなのです

ブ
ス

ゴ
キ
ブ
リ

テ
ラ
ツ
ク
ス

妖精の問題

The Question of Faeries Deluxe Edition

ロームシアター京都〈レパトリー〉の創造

2022年1月21日(金)-24日(月)

ロームシアター京都 ノースホール

ロームシアター京都

ROHM Theatre Kyoto

私は見えないものです
見えないことにされるもの
見えないことにされるということは
見えないことと同じなのです

あらすじ

一部「ブス」 作品世界でマイノリティとされる「ブス」の女学生二人。もうすぐ選挙が行われる。最近、存在感を増している「不自然撲滅党」屁当弁憤子の政見放送を二人は見る。

二部「ゴキブリ」 ラーメン屋の近くに住む貧困夫婦は、家に生息する「ゴキブリ」に悩まされている。ある日、夫は大量の害虫駆除剤を焚く。妻は妊娠しており、不意にその煙を吸ってしまい…。

三部「マングルト」 自分自身の体内常在菌を利用して作る食べ物「マングルト」。その創始者である小室淑子の意思を引き継いだ礼子による「マングルト」についてのセミナー。

「妖精の問題」上演歴	2017年 9月	初演／こまばアゴラ劇場(東京) 主催:(有)アゴラ企画・こまばアゴラ劇場
	2018年 2月	国際舞台芸術ミーティング in 横浜TPAM2018フリンジ STスポットセレクション／STスポット(横浜) 主催:Q
	10月	KYOTO EXPERIMENT2018 京都国際舞台芸術祭／京都芸術センター(京都) 主催:京都国際舞台芸術祭実行委員会
	11月	Japan Playwrights Project 2018／ Martin E. Segal Theater Center(ニューヨーク) 主催:Martin E. Segal Theatre Center, The Graduate Center, City University of New York (Frank Hentschker, Executive Director/Director of Programs)
	2020年 5月	オンライン版『妖精の問題』配信 主催:Q
	2021年 5月	『妖精の問題』オンライン・アジアツアー 〈中国語字幕配信、インドネシア版配信、トークセッション〉 主催:一般社団法人ドリフターズインターナショナル
	7月	韓国キャスト版／Took Some Plays(ソウル) 主催:ソウル・マージナル・シアター・フェスティバル

「妖精の問題」デラックス予定	2022年 1月21日～24日	ロームシアター京都(京都) 主催:ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市
	2022年 2月20日～23日	シアターコモンズ'22／リーブラホール(東京) 主催:シアターコモンズ実行委員会
	2022年 7月2日、3日	久留米シティプラザ(福岡) 主催:久留米シティプラザ(久留米市)

主催者挨拶

本日は、シリーズ「レパートリーの創造」市原佐都子作・演出『妖精の問題 デラックス』にご来場いただき、誠にありがとうございます。

この「レパートリーの創造」は、末永く上演される劇場のレパートリー演目を製作することを念頭に、2017年からロームシアター京都が継続しているプロジェクトです。このプロジェクトの新たなアーティストとして、才能あふれる新世代の劇作家・演出家である市原佐都子を迎えました。複数年にわたって2本の作品創作を委嘱し、シリーズ第五弾となる今作は、ロームシアター京都と市原の第一作目の協働となります。

市原が「自分の心のマスタピース」と言う『妖精の問題』は、2017年の初演を皮切りに、国内外で上演を重ねてきました。また、コロナ禍ではオンライン版が制作されるなど新たな取組も行われ、まさに、彼女の代表作のひとつであり、レパートリー作品と言えるものです。この作品をオーディションによって選抜された俳優、新たな演奏者、スタッフを迎え、大幅に再創作したものが、本日上演する『妖精の問題 デラックス』になります。ひとつの作品と長く向き合い、繰り返し上演することで生まれるレパートリーの可能性を拡げる機会にできればと考えています。

多くの人々に衝撃を与えた事件を契機とする今作は、事件によって直視せざるを得なかった市原自身の内面や生きづらさから創作されました。現代において「見えないことにされているもの/しているもの」である差別や偏見を露わにし、のべつ幕無しにこれでもかと提示します。コロナ禍により社会のゆがみが顕在化・深刻化するいま、より切実なものとして鑑賞者に多くの問いを浴びせかけるでしょう。

また今回の制作過程においては、一般の方々と作品テーマについて話す「おしゃべり会 戯曲を読もう、話してみよう。」やドラマトウルクを務める木村覚によるインタビューシリーズを展開しました。上演を含め、作品を介して多くの人々が意見を交わし、考える時間をつくることは、ロームシアター京都が掲げる「劇場文化をつくる」というミッションへのひとつの道筋であり、我々の役割です。

最後に、本公演の実現に際してご支援・ご協力賜りました関係各位に感謝を申し上げ、主催者の挨拶といたします。

ロームシアター京都

作・演出

市原佐都子(Q) Satoko Ichihara

直接的に事件を扱っているわけではないが、この作品は相模原の障害者施設で起きた殺傷事件の影響がある。私はあの事件とは無縁ではないと思えた。私は、子供を産める身体になってから、自分がお腹のなかに子供を授かると思えば、それはきっと「普通」ではない、見たこともない恐ろしいものであろうと、なんとなく、怖かった。そのなんとなくの恐怖が産まれてしまったのはなぜか。それは自分自身の存在への不安。すべての命が、命というだけでそのまま祝福される、というようなことは現実味がない、と子供の頃から思っていた。愛されて育ってきたが、よく小中学校の授業で「命を大切に」「個性を大切に」というようなことがテーマになったとき、私の生きている現実とのギャップを感じた。それは事件の後、犯人をテレビ上でコメンテーターが非難するのと、犯人をネット上で支持するひとたちを見たときにも思い出された。私の恐怖はそこにあり、なにか引き裂かれそうな場所で、私は私の恐ろしいものを産み出すのか産み出さないのか問われているような感覚を持つようになったのではないか。だけど、私がもし子供を産んだのならその子供にすべての命が命であるだけで祝福される、というようなことを感じてほしいと願う。ではそうなるためには、それがはっきりと真実だと響く世界となるにはどうしたらいいのだろう。題名の「問題」はプロブレムというよりクエスチョンの意味で用いている。「問題」を真っ向から取り除かなければいけないものとし解決をすることではなく、「問題」とはなんだろうと創作を開始した。それは気持ちの良い作業ではなかったが、やるべきことに思えた。観客にも不快を与えるかもしれない。演劇のできることは問題を解決することではなく、私たちの生きている世界の複雑さに触れ、それぞれがこれまでとは違う視点で世界を見たり、問いをもらうことだ。「それくらいのもと言えるし、ちいさくておきな存在というわけですね」という劇中の言葉が頭をよぎる。ちいさくておきなものとして、この作品があることを願う。

『妖精の問題』を初演したのは2017年。私にとって、そして初演の創作を共にした俳優の竹中香子さんにとっても、この作品を生み出したことは折に触れて思い出すひとつの事件でした。それから私の過去作品のなかでは国内外で一番多く再演をされている作品です。この度、私という作家と時間をかけて関わっていききたい、最終的には長く上演される新作を創作していきたい、という劇場からの申し出をいただき、はじめの一步として、この思い入れのある過去作品をデラックスと銘打って、新たな布陣で、この場所でリクリエーションに取り組めたことに意味を感じ、関わってくださった皆様に感謝しています。この度はご来場ありがとうございます。



©Flavio Karrer

市原佐都子(Q) | 劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督。1988年大阪府生まれ福岡県育ち。桜美林大学にて演劇を学び、2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回 AAF 戯曲賞受賞。2017年『毛美子不毛話』が第61回岸田國士戯曲賞最終候補となる。2019年に初の小説集『マミの天使』を出版。同年『バックスの信女 — ホルスタインの雌』をあいちトリエンナーレにて初演。同作にて第64回岸田國士戯曲賞受賞。2021年、ノイマルクト劇場(チューリッヒ)と共同制作した『Madama Butterfly』をシアタースペクタクル(チューリッヒ)、シュピラート演劇祭(ミュンヘン)にて上演。公益財団法人セゾン文化財団セゾン・フェロー。

出演

一部



朝倉千恵子
Chieko Asakura

東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。チェルフィッチュ『三月の5日間』リクリエーション、ジゼル・ヴィエンス、エティエンヌ・ビドー＝レイ『ショールームダミーズ#4』、ロロ『いつだって可笑しいほど誰もが誰か愛し愛されて第三小学校』に俳優として参加。また自身でもパフォーマンスや映像作品を制作している。



筒井茄奈子
Kanako Tsutsui

1994年生まれ。ピッコロ演劇学校本科33期・研究科33期生で演劇を学ぶ。在学中より自主公演や関西小劇場に出演。その後、関西だけでなく、さまざまな劇団やカンパニーにも出演。また、内田伸輝監督作品・映画『女たち』に出演するなど、映像にも積極的に参加している。

二部



大石英史
Eiji Oishi

1987年大阪生まれ。俳優。2015年から2020年までdracomに登録メンバーとして参加。今まで、「お寿司」「akakilike」「努力クラブ」「ブルーエゴナク」「THE ROB CARLTON」「劇の虫」「庭劇団ベニノ」「維新派」「新聞家」「トリコ・Aプロデュース」ソ・ヒョンソク演出作品、「sons wo:」、村川拓也演出作品、藤田貴大作・演出作品などに出演。国内外の演劇祭にも多数参加している。



キキ花香
Hanaka Kiki

2009年「劇団子供鉅人」入団。現在は東京を中心に俳優として活動するかたわら、舞台や映画の衣装、スタイリストとしても活動の幅を広げる。近年は今泉力哉監督『あの頃。』看護婦役、山口森広監督『捨てていって捨てないで』主演。衣装、スタイリストとして山西竜矢監督『彼女来々』、ピンクリパティ『とりわけ眺めの悪い部屋』、木村聡志監督『階段の先には踊り場がある』(2022年春公開予定)など。

三部



廣川真菜美
Manami Hirokawa

大学卒業後、「小松台東」「ミナモザ」「桃尻犬」といった話題の団体に参加。舞台を中心に活動しながら、近年では足立紳監督『喜劇 愛妻物語』、瀬々敬久監督『なりゆきな魂、』等の映画、タニノクロウ秘密倶楽部『Marzo VR』、webCMなどの映像作品にも出演するなど活動の場を広げている。



富名腰拓哉
Takuya Funakoshi

2000年生まれ。日本大学芸術学部映画学科演技コース在学。18歳の頃からエキストラや小さな役で舞台・ドラマに出演し、最近は自主制作映画で主演を務める。俳優という仕事を「社会に対して訴えることができる人たちの代弁者」と捉え、今後は様々な作品に関わりながら、舞台や映画などジャンルを問わない活動を目指している。明るく人見知りのない性格。



緑ファンタ
Fanta Midori

大阪を拠点に主に小劇場の舞台に出演。1993年より社会人劇団「満員劇場御礼座」に所属し、年一回ベースの公演に参加。2014年より、美術家／演出家・梅田哲也氏の『O才』『5つの船』『7つの船』他に出演。タイ・バンコクで、子どもたちのストリートパフォーマンス『なんだこれ?! サークル』(2016)にも参加した。

演奏

秋元修……ドラム
Shu Akimoto

札幌出身。2014年、洗足学園音楽大学ジャズコース首席卒業。Wacken Open Air 2013に「Mysterious priestess」として、Montreux Jazz Festival Japan 2017に「菊地成孔プロジェクト」として出演。2020年、単身渡米。DC/PRG, Song-XX, Klehe等に参加。

額田大志……シンセサイザー
Masashi Nukata

プロフィールはP9参照

石垣陽菜……ベース
Haluna Ishigaki

神奈川出身。洗足学園音楽大学ジャズコース卒業。Mike Stern、Randy Brecker、日野皓正、渡辺香津美らと共演歴をもつ。自身のバンド「TAMTAM」ではカナダツアーやFUJIROCKに参加。2000年5月に発売したアルバム「We Are the Sun!」では鎮座DOPENESS氏と共演。その他、多くの作品に携わる。

高橋佑成……ピアノ&キーボード
Yusei Takahashi

東京生まれ。明治学院大学文学部芸術学科卒業。13歳の頃からジャズに興味を持ち独学でジャズを始める。現在は「世田谷トリオ」「m° fe」「日野皓正Quintet」、自身が主宰する音楽ユニット「秘密基地」、トラックメイカーのSTUTS氏のバンドに参加などジャズに限らず多岐に渡って活動。

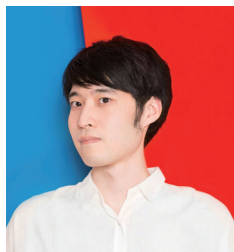
音楽

額田大志

Masashi Nukata

作曲家、演出家。1992年東京都出身。8人組バンド「東京塩麴」、演劇カンパニー「ヌトミック」主宰。「上演とは何か」という問いをベースに、音楽のバックグラウンドを用いた脚本と演出で、パフォーマンスの枠組みを拡張していく作品を発表している。舞台音楽の作曲家としてQ、パスカル・ランベール、岩淵貞太、コン・フンズなどに参加。最近はその目的のない集まりを開催することに精を出している。

©コムライ／タカラマヤ



市原佐都子率いるQには、2016年に上演された『毛美子不毛話』以降ほぼ全ての作品に音楽で参加してきた。私にとってQと共に作品をつくることは、演劇の音楽に向き合う6年間でもあった。

音楽家が演劇に関わる時、大抵はコンサートと演劇の違いに悩まされることになる。多くのコンサートは音楽を聞くために観客がその場に集う。様々な演出が加わった中でも、最も注目されるのはあくまで「演奏」、すなわち音楽であるのがほとんどだろう。一方演劇では、オペラやミュージカルを除き、音楽を聞くために劇場へ訪れる観客は稀である。それだけが理由ではないが、演劇の音楽はいわゆる「BGM」のように機能し、俳優の演技やストーリーを盛り立てるものとして作品の中で自然と後景化していくことがある。これはこれで、演劇を成立させるための正しい判断である。しかし後景化した音楽は「音楽としては」面白くないことが多々ある。なによりも、一人の音楽家として作っていて虚しくなる。ネットに落ちているフリー音源でも充分ではないかと。では「BGM」のような音楽に落ち着かず、かつコンサートとも異なる形で、演劇作品の前景／後景の境界をどのように彷徨うことができるか？この課題に、私をはじめ数多の音楽家が頭を悩ませてきた。もちろん、それだけ挑戦しがいのある難問でもある。

Qは私が関わりはじめたときには、「BGM」のような音楽を一切使用していないカンパニーだった。音楽による情動の揺さぶりがなくても、言葉の力で観客と対峙するには充分だったと思う。裏を返せば、音楽はいらないともいえる。そんなQだからこそ、音楽をつくる時は、言葉との関係には特に気を配る。一つの歌のメロディーを作るだけで悶々と何時間も悩み続けることもある(悩んでばかりですね……)。前景／後景でいえば、Qの近作は音楽の前景化によって、言葉の持つ力を最大限に増幅させることを試みている。その中で私も、音楽家としてできるだけ観客に届けなければ、という使命感のようなものが生まれてくる。

最後に『妖精の問題』について。本作は何度も上演を重ねてきたが、音楽は長らく俳優とピアニストによる1対1のセッションを基本としてきた。今回のデラックス版では、4人のミュージシャンによるバンド演奏となる。単純に「デラックス！」であるが、せっかくのリクリエーションである以上は、そうした派手さに留まらない効果を探っていきたい。

……と色々書きましたが、まだまだこれから作って作って、頑張ります。言葉と音楽のセッションにも、ご注目いただけたら幸いです。お楽しみください！

芸術と社会との関係はときにギクシャクしたものになります。でも、芸術と社会とはそもそもそういう間柄なのではないでしょうか。

社会からの要求に応えようと過度に構えると、芸術は東京2020オリンピックの開会式のように、あたり障りがなく、心地良くて、それゆえに内容空疎なものになってゆきそうな気がします。芸術がそうした傾向を帯びることに私は反対ですが、強烈に大きな変化の兆しが生じていることを無視することもできません。

例えば『公の時代』(朝日出版社、2019)のなかで卯城竜太(Chim ↑ Pom)さんは、20代前半の藝大生が飲み席で「アートが感情を逆撫でしていい理屈がわからない」と言っていたと話しています。藝大生が随分と臆病になったものだと一笑に付すことは簡単ですが、私にはできません。すべての藝大生(あるいは芸術を創作しようとしている若者たち)がそう考えているとも思いません。ただ「アートは人の感情を逆撫でしていいのだ」と主張する特権を芸術に無条件に認めることは、この社会においてかなり難しくなっていると思うのです。

そうしたなか、市原さんは「妖精」という「問題」を扱う演劇作品を上演します。「妖精」とは誰のことか、ヒントはここにあります。「私は見えないものです／見えないことにされるもの／見えないことにされるということは／見えないことと同じなのです」(『妖精の問題』の冒頭『バックスの信女 ホルスタインの雌』所収、白水社、2020)。世の中から見えないことにされているもの(妖精)を可視化すること、そうしないと「問題」は浮かび上がってこないのですが、そうするだけで感情を「逆撫で」されたと受け取る観客も出てくるかもしれません。表象(上演)することはそれ自体で暴力的である、そういう演劇観もあるでしょう。重要でデリケートな「問題」を扱うのですから、その語り方は丁寧に練り上げられたものであるべきです。

でも、だからと言って、市原さんが自らの「わがまま」(ヘルマン・ヘッセ)を削ぐことになってもやむなし、とは私は思いません。この世である芸術家だけが感知している世界の姿があるのだとしたら、私はその姿が見てみたいと望む一人です。仮に社会との関係がギクシャクしたとしても、どこかでそういうものかと思ひながら、市原さんがひらく芸術の可能性を目撃したいと願望しています。

随分と回りくどい文章を書いてしまいました。今日、この上演を、みなさんがときに笑いながら、ときに深く考えながら、またときに感情を逆撫でされながら、楽しんでもらえたら幸いです。

ドラマトウルク

木村覚

Satoru Kimura

1971年生まれ。日本女子大学教授。専攻は美学、ダンス研究。20年以上、日本のコンテンポラリーダンス・舞踏を中心としたパフォーマンス批評を行っている。2014年よりダンスを作るためのプラットフォーム「BONUSS」を始動。主な著書に『未来のダンスを開発するーフィジカル・アート・セオリー入門(メディア総合研究所)』、『大野一雄・舞踏と生命ー大野一雄国際シンポジウム2007』(共著 思潮社)、『スポーツ／アート』(共著 森話社)、『笑いの哲学』(講談社)などがある。

はじめて市原さんのお話を伺った際に、「古代ギリシャの劇場のような…」、「舞台と客席がはっきり分かれていないような…」という何やら矛盾しているイメージが聞けて楽しかったです。ギリシャ劇場の客席を拡張すれば、現在でいうところの陸上競技場になると勝手に妄想しました。客席→トラック→フィールドという3つのレイヤーからなる形式です。それを反転させて、中心のフィールドを客席にし、周りを取り囲むトラックを舞台にすることで、ギリシャ劇場のような形式性を持ちつつ、外側から全貌を眺めるという視点を極力無くし、演劇を内側から体験するものになるのではないかと思います。また舞台が劇場の外周に沿うことで、舞台の幅だけでいうと約45m、多分、宝塚大劇場の2倍近くあります。距離感で色々な動きをつくれますし、3つの短いお話は1つの長いお話しますので相性が良さそうだと思います。見る方は少し大変ですね。すみません。(家成俊勝)



衣裳イメージ
ラフ案

初めて市原さんとお会いする際、緊張したのか1日間遅え、24時間後無事にタリーズコーヒーで対面することが出来ました。楽しくお喋りをした、その時のそのままの市原さんが、みんなと一緒に考えてじっくり作る。という特別ではない方法で、デラックスに練り上げます。衣裳は“成立してしまわない方法”を考えながら作りました。

出演者の皆さんは、強烈な臭気で本能に訴えかけられ、宿命的に、この作品にホイホイ引き寄せられてきたのだと感じます。

さらに今回私が感動したのはスタッフ陣です。「NO」とだけいう方は一人もおらず、皆さん何らかの形で、どこからか新たな可能性を見つけ出し、作品を受け止め舞台上へ繫げます。この布陣での『妖精の問題 デラックス』をロームシアター京都のレパトリーとしてお届けできることが、とても嬉しいのです。

誰にも解毒出来ない毒は、とても平等。皆様と一緒に食らうことが出来て、ここは本当に豊かな場だと感じます。本日は劇場へ観に来てくださり誠にありがとうございました。

作・演出 | 市原佐都子(Q)
音楽 | 額田大志(東京塩麹/ストミック)

出演 | 一部…朝倉千恵子、筒井菰奈子
二部…大石英史、キキ花香
三部…廣川真菜美、富名腰拓哉、緑ファンタ

演奏 | 秋元修、石垣陽菜、高橋佑成、額田大志

舞台美術 | dot architects
衣裳 | 南野詩恵
照明 | 魚森理恵
照明操作 | 木内ひとみ
音響 | 稲荷森健
音響助手 | 濱田夢花(京滋舞台芸術事業協同組合)
映像 | 小西小多郎
舞台監督 | 川村剛史(ロームシアター京都)

ドラマトゥルク | 木村覚

演出助手 | 山田航大
制作助手 | 寺澤聖香
制作協力 | 山里真紀子(Q)

チラシデザイン | 吉岡秀典(セブンバーカウボーイ)
イラスト | 狩野岳朗
撮影 | 中谷利明
パンフレットデザイン | 永戸栄大

翻訳 | オガワアヤ

制作 | 眞鍋隼介、木原里佳(ロームシアター京都)

[ロームシアター京都 スタッフ]
舞台 | 山田比呂夫、大西貴士、船越美紀、石田昌也、井上達也、朝霧賢二、中田舞
照明 | 元木浩一、林いづみ、亀井杏寿
音響 | 合田洋祐、豊田英介

広報 | 松本花音、山形ゆき
要券 | 日浦由美子
事業制作 | 長野夏織、里見明音、齋藤啓、栢谷雄一郎

プログラムディレクター | 小倉由佳子

京都芸術センター制作支援事業

企画製作 | ロームシアター京都
主催 | ロームシアター京都
(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
京都市

ロームシアター京都 <レパトリーの創造>

市原佐都子/Q「妖精の問題 デラックス」

2022年1月21日(金) - 24日(月)

21日(金)19:00 | 22日(土)14:00 / 18:00 | 23日(日)14:00 | 24日(月)14:00 / 19:00

ロームシアター京都 ノースホール

【関連企画】

「妖精の問題」の「問題(クエスト)」をひもとく

<インタビューシリーズ>

本作でドラマトゥルクを務める美学者の木村覚がインタビュアーとなり、さまざまなジャンルのゲストを迎えたインタビューシリーズ。

ゲスト

第1回…鈴木励滋(「生活介護事業所カブカブ」所長/演劇ライター)
第2回…卯城竜太(アーティスト/ Chim ↑ Pom)
第3回…大前葉生(小説家)
第4回…公開準備中

掲載 | ロームシアター京都 WEBマガジンSPIN-OFF
<https://rohmtheatrekyoto.jp/spin-off/>



<おしゃべり会「戯曲を読もう、話してみよう。」>

ファシリテーター | 鶴飼慶樹(京都岡崎 蔦屋書店 コンシェルジュ)

第1回…2021年11月27日(土)第一部「ブス」を読む
第2回…2021年11月29日(月)第二部「ゴキブリ」を読む
第3回…2021年11月30日(火)第三部「マングルト」を読む
会場 | パークプラザ3階 会議室
主催 | ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、
京都岡崎 蔦屋書店

レパトリーの創造

ロームシアター京都が、2017年度から取り組んでいるプログラム。劇場のレパトリー演目として時代を超えて末永く上演されることを念頭に、公立劇場として主体的に作品製作に取り組み事業です。また、作品創造のプロセスを通じて、俳優、ドラマトゥルク、制作者等の専門家人材の育成や観客育成のための関連プログラムを企画し、レパトリーの創造から地域における劇場文化をつくることを目指します。

・木ノ下歌舞伎「心中天の網島ー2017リクリエーション版ー」(2017年10月)
・木ノ下歌舞伎「糸井版 摂州合邦辻」(初演2019年2月、再演2020年10-11月)
・ジゼル・ヴィエンヌ、エティエンヌ・ビドー=レイ『ショールームダミーズ #4』(初演2020年2月、再演2021年11月)
・ロームシアター京都開館5周年記念事業
松田正隆 作・演出「シーサイドタウン」(初演:2021年1月)

ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto